

アジアのとらえ方

-アジアの近現代の輪郭と展望-

アジア研究者 岩崎 育夫

1. アジアの原型

1) 地理的社会的に見た三つのサブ地域とキーワード

本日は「アジアはこの様な特徴があります、その様な地域です」と言う話をしたいと思います。具体的に3つの視点から話をします、第1の視点はアジアは中国、日本を含めた東アジア、インドを中心とする南アジア、その中間にインドネシア、タイを中心とする東南アジアの3つのサブ地域があります。この3つのサブ地域を踏まえた上で、アジア全体と使い分けながら話をしたいと思います。第2の視点はアジアの歴史は古代、中世、近代、現代とあって、古代から始めなければいけないのですが、今日は近代と現代を中心に話をしたいと思います。何故、近代と現代かという、現代のアジアの政治、経済、社会は何処が出发点か、勿論2千年~3千年前の歴史の始まりがアジアの出发点ですが、私は、現代のアジアの政治、経済、社会の特徴は近代の植民地時代に作られたと考えているので、今日の話は近代のヨーロッパのアジアの植民地化を中心として、それを受けて現代のアジアはどうなっているのかと言う話をさせていただきます。第3の視点は自律と他律の二つの視点でアジアの話をしたいと思います、自律とは簡単に言ってしまうと「自分の事は自分で決める」、政治、経済、社会の方向性を自分達で決めることです。他律は植民地時代を思い出して頂きたいのですが自国の政治、経済、社会を「自分で決める事が出来ない」、宗主国によってイギリス、フランスが、日本も植民地支配をした国ですが、大枠が決る、これを他律と言います。アジアの歴史は自律で出発したが、他律、自律、他律と変遷し現在ようやく自律を回復したと言うのが今日の話の最後になります。自律と他律を組合せながらアジアは大きな歴史の中を流れて来たと言う話をしたいと思います。

アジアの原型、言ってみればアジアの出发点です。今日はヨーロッパの植民地化によってアジアは大きく変わった、また、第二次世界大戦後の独立後はアメリカの影響によって政治、社会は変わったと言う話をしますが、しかしアジアがどの様に変ったかを知る為には、変わる前のアジアはどういうものだったのか抑えておかなければならない、そのためにアジアの原型をみておく必要があります。

アジアは基本的に東アジア、東南アジア、南アジアに分けられます、どうして3つに分けるのか、地理的に社会的に民族文化的に違うからです。どう違うかと言いますと、東アジアは一言で言えば、「中国文化圏」です。中国文化とは儒教と漢字のことで、中国で生まれた漢字を朝鮮、日本、北ベトナムで使っていた。儒教は孔子が作り出した宗教というよりも政治思想ですが、朝鮮と北ベトナムの国を支える思想だった。日本では儒教は関係ないと思うかもしれませんが、徳川時代は儒教を体制思想にしていたので、その意味で東アジアは儒教文化圏、中国文化圏です。政治体制は、中国の皇帝が周辺国の国王を任命する事を冊封体制と言いますが、これによって周辺国の国王は支配の正統性にしてきた。日本も室町時代に3代将軍足利義満は自ら進んで冊封体制に入る事により支配者としての正統性にした。何れにせよ、中国と周辺国は今で言う従属関係にあり、中国は東アジアの頂点に位置していたので、政治的、文化的にも東アジアを中国文化圏と言う事が出来る。

南アジアは現在6ヶ国あり、各国の歴史と民族文化が違うように思われるかもしれませんが、この地域は「インド文化圏」と言う事が出来ます。インド文化とはヒンドゥー教の事です。インドには仏教も誕生しましたが、ヒンドゥー教が力を強めると仏教は廃れてしまい、現在仏教徒は僅か1%しかいない。ヨーロッパのキリスト教、中東のイスラームと比べて、アジアは仏教世界と言う事は出来るが、それは東アジアと東南アジアに伝わって主要宗教の1つになったからです。インドには、イスラームもありますが、歴史的にはヒンドゥー教を軸とした文化圏と言う事が出来ます。また、南アジアには6ヶ国がありますが、ヨーロッパに植民地化される前のインドは政治的に「一つだった」と言

う事が出来ます。

東南アジアは「多様な小世界」です。インドネシアやタイなど 11 の国がありますが、全てが違うと言う訳ではありませんが、宗教と言語が多様です。何故、東南アジアが多様な地域なのか、その理由の一つは地理にあります。中国は揚子江と黄河が中心で、その地を中原と言いますが、世界の一大稲作地域で、インドはガンジス川の流域は世界有数の稲作地帯で、これによって多くの人口を養う事が出来る。これに対して東南アジアは島嶼部と大陸部に分かれているだけではなく、島嶼部は数万の島々からなり、大陸部も険しい山脈があって中国やインドの様な大平原がないので大きな社会は生まれない、そのため、強大な国家も生まれれないと言う事です。東南アジアは地理的な理由によって様々な小国からなる「多様な小世界」と言うのが特徴です。

アジア各地に支配者が世襲制の王朝国家が続いた。これは中国で言えば漢とか唐がそうで、インドもマウリヤ帝国に始まってその後も世襲制の王朝国家が続きました。しかし、アジア全体でみると当時は 30~40 ほどの中小国があり、巨大な中国とインド、それに中小規模国という構図からなり、この中小規模国には日本も含まれていて、中国の脇の小さな国と言うのが日本の位置でした。話を纏めると、植民地される前のアジアは中国とインドがずば抜けていて、その周りに様々な中小規模の国が存在して、民族文化的に政治的にインドと中国を頂点に他の国がその間に埋没していたと言うのがアジアの構図です。

イスラームは 610 年に中東のアラビア半島で生まれた宗教ですが、瞬く間に周りに伝播して大きな変化をもたらした。インドは 13 世紀に、中東勢力でなく中央アジア、具体的に言いますとアフガニスタンの勢力が、中東にイスラームが誕生するとイスラーム化して、隣国の豊かなインドの資源を狙って征服し、その結果インドにイスラームが入って来た。現在ヒンドゥー教とイスラームの二大勢力が併存していますが、その歴史的起源はそこにありました。ヨーロッパに植民地化される前のアジアを全体的に見みると、基本的には中国は儒教を中心に、インドはヒンドゥー教とイスラームの 2 つの宗教、東南アジアは仏教もありイスラームもあり儒教もありました。アジア各国に固有の民族文化が誕生したと言うのが植民化される前の状態で、これが今日の話の出発点になります。

2) 世界のなかでみた前近代アジアの二つの対照的な特徴

これはインドと中国から見た場合ですが、中東とか地中海ヨーロッパとの貿易は行われましたが、しかしそれによってインドと中国の人々が生活していた訳でなく、それは付け足し程度でしかなかった。基本的に自給自足で稲作基盤型の中国とインドは世界有数の稲作地帯で大勢の人を養う事が出来る、ここから大勢の人口が生まれて中東とかヨーロッパに依存しなくても生活は出来た。これに対してヨーロッパは、アジアや世界を征服してその資源を持って来て自分の生活の足しにしないと発展出来なかったと言う事情がありますが、アジアの場合、インドと中国は自給自足して世界の他の地域は関係がなかったと言う事です。これが自律のアジアです。何故、インドと中国が世界に進出しなかったか最大の理由は、中東やヨーロッパがなくても生活出来た言う事です。

もう一つの特徴は民族文化が多様な地域なことで、これは世界の他の地域と比べるとアジアの特徴が良く浮かびます。ヨーロッパには現在 30 を超える国が有り、ムスリムもいますが、基本的にキリスト教です。カトリック、プロテスタント、ロシア正教の違いはありますが、キリスト教が地域諸国の共通軸になっている。また、ヨーロッパ連合 (EU) を創りましたが、その理由は、ローマ時代から地域諸国の間で活発な貿易、経済交流が行われきたからで、これがアジアとの大きな違いです。中東は 20 近い国があり、イスラームは 2 つの宗派に分かれていて対立していますが、地域諸国がイスラームと言う点で共通しています。言語も、トルコはトルコ語、イランはペルシャ語ですが、これ以外の国は全てアラビア語です。或る意味では、ヨーロッパ以上に中東はイスラームとアラビア語という、宗教と言語の共通性を持っており、世界最大の共通の価値軸を持った地域なのです。このようなヨーロッパや中東と比べると、アジアは世界各地で誕生した宗教が並存する地域です。仏教はインド、イスラームは中東、キリスト教は中東で生まれたがローマ帝国の宗教になってからヨーロッパに定着して、ヨーロッパがアジアを植民地化するとアジアに持ち込んだもので、アジアには世界の 3 大宗教の

全てがある。

言語も世界各地から影響を受けている。現在世界には4つの文字系統があり、漢字は中国で生まれた漢の国の字で、日本や韓国など、東アジアの国は漢字文化圏です。ブラーフミー文字はインドで生まれたもので、スリランカやネパールやブータンなどは、二千年以上前にインドで生まれたブラーフミー文字の国です。中東で生まれたアラビア語はアラム文字と言いますが、アラム文字を国語にしているのはパキスタン、それにウイグルは中国の一部ですが言語的には中東の影響を受けたもので、ウイグルで分離独立運動が起こっている一因はここに 있습니다。漢字世界ではなく中東世界に属しているからです。もう一つが、ヨーロッパで生まれたラテン・ギリシア文字文字です。アジアではインドネシアやフィリピンがそうで、ラテン・ギリシア文字が国語になっている。その理由は、ヨーロッパは植民地化すると、統治の便利の為にローマ字を持ち込み、独立後も昔の言語に戻らないで、植民地時代の文字を使っている為です。アジアの原型の話をしました。政治的には自律であるなかで、宗教文化的には世界の様々な地域から影響を受けていた事を理解頂けたと思います。

2. ヨーロッパの植民地化とアジアの大変容：第一次の「他律」

1) 西欧諸国の植民地化

このようなアジアがどの様になって現代に至ったのか。アジアは近代にヨーロッパの植民地になるが、何故アジアを植民地化したのかは後でみるとことにして、どの国が植民地にしたか、スペイン、ポルトガル、オランダ、イギリス、フランス、アメリカがそうで、日本も東アジアを植民地化した一員です。アジアは南アジア、東南アジア、東アジアに大きく分かれそれぞれに自律的な生活を送って来たが、最初にインドが植民地化されます。何故インドなのか理由は簡単です。アフリカ大陸の喜望峰を廻って北上すると真っ先に出会うのがインドだからです。南アジアを植民地化すると、更に東に進んで東南アジアを植民地にしましたが、中国、日本、朝鮮の東アジアは植民地化されていません。ヨーロッパ勢力の強大な軍事力を持ってすれば、東アジアも植民地化しても当然なのですが、その理由は中国にありました。当時の中国は清が支配していて、これは満州人が漢人の国の明を滅ぼして創った国で、軍事的に極めて強大でした。そのため、中国（清）には手が出せなかったのです。ただ、清を飛ばして日本を植民地にできたのではないかと思うかもしれませんが、日本を植民地化する前に清を植民地化する必要があります。日本が植民地化されなかった一つの理由は、清が強大だったからで、ヨーロッパ勢力は朝鮮や日本に手が出せなかったのです。

次に、なぜアジアの植民地化が可能になったのかと言うと、ルネッサンス、科学の発達、地理上の発見で遠洋航海の船が次々に作られ、産業革命で経済力と軍事力が増大したからです。この時代のヨーロッパでは鉄砲とか大砲が出来て、日本に鉄砲が入って来たのはポルトガルが伝えたからです。これに対して、インドは象が主体の戦争なので、鉄砲や大砲で装備したヨーロッパに対して前近代的な兵器しかなかったアジアは征服されて植民化されたのです。重要なのは、何の為にヨーロッパ勢力はアジアを植民地化したのかと言う事ですが、目的はアジアの資源です。資源とは中国は米の国、インドも米の国で、アジア最大の富の産地です。これが、現在13億、14億の人口を持つ世界1位と2位の国にした理由でもあり、目的は農産物と人なのです。とはいえ、別にアフリカ人のように奴隷にするわけではなく、当時のアジアは世界の70%位の人がいましてから、彼らを作る農産物の資源が欲しかったのです。アメリカとカナダも同じ頃にヨーロッパの植民地になりましたが、そこではアジアと同様に資源と人が欲しかったからではありません。アメリカには土着インディアンが居ましたが、資源は殆どないし農産物も殆どない。植民地化した目的は移住にあり、ヨーロッパは土地が狭く人が多いが、生活する空間がないので、一部の人びとを移住させる目的で植民地化したのです。

アジアの植民地化の目的は、具体的には2つに分けられます、第一段階は17世紀初めにスペイン、ポルトガル、オランダ、イギリス、フランスがアジアを植民地化したが、これらの国が殺到したのはインドネシアのマルク諸島、当時モルッカ諸島と言われていた地域です。現在、マルク諸島には人もあまりいないし資源もないが、なぜ殺到したのか香辛料のためです。ヨーロッパ人の主食である肉を

保存するには香辛料が必要ですが、ヨーロッパにはなくアジアにあったので、貴重品の貿易独占が目的だったのです。

第二段階が一次産品の栽培と輸出です。ヨーロッパで産業革命が起こり、工業製品が作られるようになりますが、工業製品を作るには資源が必要です。資源は何処にあるかヨーロッパになくアジアにある。ここから 19 世紀になると、アジアにやって来た目的が貿易ではなく工業化に必要な資源、更にはコーヒーやサトウキビ、ゴムとか紅茶がそうですが、一次産品と呼ばれる現在日常生活に欠かせないものの調達です。熱帯アジアでコーヒーや紅茶やゴム等を栽培すると良く育つことから、植民地にした国でこれらを栽培してヨーロッパや世界に売って儲けようと考えたのです。そのさい、コーヒーやサトウキビ、紅茶を作るには何万、何十万の労働者、それにプランテーションと呼ばれる農園が必要ですが、そのためには土地と人を支配しなければいけない。

第一段階と第二段階の目的を良く象徴するのがマレーシアです。イギリスは第一段階の貴重品の貿易が目的の時は、シンガポール、ペナン、マラッカの港町だけを押さえていて、内陸部には関心がなかった。インドネシアで採れた香辛料をシンガポールに持って来てヨーロッパに持って行く、その為に港だけ押さえておけば良かったからです。しかしイギリスで工業化が始まると資源が必要になり、マレーシアには世界最大の埋蔵量の錫があり、ゴムも有名です。元々はブラジルのアマゾン川流域で自生していたゴムの木を、イギリス経由でマレーシアに持ってくると、良く育つことが分かった、その為にゴムのプランテーションを作るは、土地と人を支配しなければならないので、それでマレーシア全域を植民地化したのです。

2) アジアの大変容：分節していたアジアが、受動的に「一つのアジア」になる

この結果アジアは大きく変わりました。アジアがどの様に変容したかを 3つの点、すなわち、政治、経済、社会の代表的な話をします。まず政治です。ヨーロッパが来る迄アジアを支配していたのは王朝国家で、漢とか唐とか明とか世襲制支配者が支配していたが、アジアを植民地化すると王朝国家を廃止した国は殆どないが実権を奪って名目的なものにして、植民地国家を創って統治しました。これにより、アジアは異民族支配の下に置かれてましたが、統治の為に一部のアジア人に西欧型教育を受けさせました。行政官として、イギリスは自国から優秀なオックスフォードやケンブリッジ大学の卒業生を連れて来て官僚に任命したのですが、インドは当時から億を超える巨大な国であり、イギリス人だけでは足りないのので、現地のインド人を補助員として使おうとして知識、専門技能を教えたのです。第二次世界大戦にアジアは独立しますが、独立指導者になったのは植民地時代に西欧型教育を受けた専門家が多かったのです。これは結果論ですが、西欧型教育を施した事によって独立指導者を育てた事になります。

経済は、輸出向け一次産品栽培のためにアジア各地に大規模なプランテーションが作られ結果、資本主義が持ち込まれたことです。それ迄は自給自足型経済がアジアの基本だったのが、植民地化により資本主義が入って来たのです。ただ、ヨーロッパはアジアの全域に資本主義を持ち込んだのかという話は簡単ではありません。インドやインドネシアやベトナムやフィリピンなど、土壌が豊かで資源開発に適している所はプランテーションが造られましたが、そうではないところ、例えばラオスは今でも貧しい国の一つですが、ラオスを植民地にしたフランスはラオスで何もしていない。資源が何もなく土地も痩せていたからです。植民地時代に資本主義が導入されましたが、それは一部の地域に限られたもので、それ以外の地域は関係なかった。現在、アジアは開発が進んで豊かになった国と開発が上手く行かず貧しい国に分かれています、その原因の一つが植民地時代の経済政策にあったと言う事です。

社会は、東南アジアに大勢の中国人とインド人が労働者として移動したことです。なぜ移動したのか、東南アジアを植民地にした目的はコーヒー、紅茶、ゴムなどのプランテーションを作ることにあり、大勢の労働者を必要としたが、東南アジアは人口が少ないので世界最大人口地域の中国とインドから労働者を連れて来たことが理由です。ただ、アフリカ人奴隷のように強制的ではなく、中国とインドは人口が多く貧しくて生活出来ないのので、東南アジアにゴムのプランテーションや錫鉱山の労働

者としての仕事を求めて自発的にやって来たものです。植民地時代に中国人は世界で 4000 万人が出稼ぎ労働者として移動し、その内の約 70%が東南アジアに集中したと言われています。この中国人とインド人の移動が、どの様な意味を持ったかと言うと、「単一民族型社会から多民族型社会」への変容です。

これをマレーシアで説明すると良く理解頂けると思います。マレーシアはイギリスが来る前はマレー人の国で、彼らはインドネシアのスマトラから移住して来たもので、民族はマレー人、言語はマレー語、宗教はイスラームという、典型的な単一民族型社会でした。しかしイギリスの植民地化の目的がゴムと錫の開発にあり、何十万、何百万の労働者を必要としたが、マレーシアは人口が少ないので、中国人とインド人をマレーシアに呼び込んだ。マレーシアは 1957 年に独立しますが、その時の民族構成はマレー人 60%、中国人 30%、インド人 10%です。これを多民族型社会と言います。現在アジアの大半の国が多民族型社会ですが、アジアが単一民族型社会から多民族型社会に変わった理由はヨーロッパの植民地化にあります。というのは、植民地支配が終わってもほとんどの中国人とインド人は母国に戻らなかった。その理由は、今更戻っても仕事がないが、マレーシアには仕事があるし家族もいるので、マレーシアに定住する事を望んだからです。

さきほど、植民地国家の補助員としてインド人、インドネシア人、ベトナム人などに西欧型教育を受けさせたことをみましたが、ここから官僚や弁護士や医者が誕生しました。彼ら全員がそうでなく一部の人達ですが、植民地支配が深まる過程で民族意識を持ちます。民族意識とは何かと言えば、イギリスやフランスやオランダが自分達を支配する権利はない、自分達の国は自分達が治めるというものです。アジアの民族意識と独立意識、それに独立指導者は植民地時代に西欧型教育を受けた知識人の中から生まれたと言う事です。

3. 近代日本のアジア進出と意義

ヨーロッパ勢力に替わって日本がしばしばアジアを支配しますが、日本のアジア支配がもたらしたものは何か一言で言えと、アジアの人々に独立を「渴望」させた事です。ヨーロッパの植民地支配は半永久的に続くと思われていたが、日本が軍事進出してヨーロッパ人支配者を追い出した、ここからヨーロッパ人も全能ではないことを知ったのです。しかし、その後の日本の支配統治は、ある意味でヨーロッパ以上に過酷だったので、ヨーロッパ人も日本人も我々を支配する権利はない、自分の国は自分が治めるという意識が生まれて、アジアの人びとに独立を渴望させののです。

もう一つは、日本が歴史の時間を早めたことです。これは、もし日本のアジア支配が 10 年や 20 年と続いた場合、支配が固定化してしまうが、しかし日本は連合軍に敗れて、アジア支配は 3 年半で終わったので、独立がはじまったという意味です。

4. アジア諸国の独立ー「自律」に回復

1) 独立の仕方

アジアの独立は、第二次世界大戦が終わった 1945 年に本格化しますが、独立指導者は先程みた植民地時代に登場した弁護士や官僚等が中心です。彼らは、単にインドで英語教育を受けた、フィリピンでアメリカの英語教育を受けたというよりも、欧米留学組が大半です。インドの独立指導者はネルとガンディーですが、2 人ともイギリス留学組です。独立指導者が登場して独立が目前に迫ってきましたが、独立後の政治や経済をどの様にするのか、具体的には民主主義国家にするのか、共産主義国家にするのかという二つの集団に分かれました。民主主義国家を主張したのは欧米留学組、共産主義国家を主張したのは留学組もいましたが、基本的には自国組です。二つの集団の力関係は違いますが、中国、インド、インドネシア、フィリピンなど、アジアの全ての国で民主主義国家か共産主義国家かという争いが起こり、ここから政治社会混乱が起こったのです。

欧米諸国に眼を向けると、第二次世界大戦が終わると、もう植民地の時代ではないとして基本的に独立を認めたのがイギリスとアメリカです。アメリカ植民地だったフィリピンは、アジアで一番早く

1946年に独立し、インドは1947年に独立しました。これに対して、オランダとフランスは植民地の独立を容認しなかった。その理由は、自分達がベトナム、インドネシアを追い出されたのは、日本がそうしたからで、日本の敗戦後は当然に植民地を復活させるとした。そのため、両国が独立宣言をすると、軍隊を送り込んで、独立戦争が始まったのです。インドネシアとベトナムで独立戦争が起りましたが、戦争には軍隊が必要です。ヨーロッパは植民地化を維持するために現地人に軍隊を持たせない政策を採っていましたが、インドネシアで独立戦争が始まったのは、日本が創った軍隊があったからです、

2) 多くの国で政治社会混乱と紛争の発生=原因は多民族型社会の国家統合にあり

紆余曲折があったものの、アジアは独立を達成しますが、しかし植民地支配が終わると、それ以前の安定した時代に戻ったかと言えば、そんな国は一つもありません。多くの国で政治社会混乱と紛争が発生したからで、その原因は多民族型社会の国家統合と国民統合にありました。国家統合とは、独立時の国家領域を崩す事を絶対に認めないことです。中国は植民地化されていませんが、日本とヨーロッパの植民地支配が終わった後は、台湾と香港とチベットとウイグルの領土を維持することが中国にとっての国家統合なのです。とりわけ、中国が台湾に拘るのは、日本に奪われた台湾を取り戻さない限り国家統合が完成しないからです。国民統合とは、先程マレーシアの所でお話しましたが、元々マレーシアはマレー人が住んでいた国で、独立後に中国人とインド人がマレーシア人になったのは良いのですが、3つの民族は言語も宗教も違い、同じ国の仲間と考えている人は極めて少ない。そのため、もし、マレーシアが外国から侵略されて、政府がマレーシアの独立を守るように国民に呼びかけても、互いに同じ仲間ではないと考えていたならば、団結して国を守ることができない。それだけでなく、民族や宗教や言語の違いを原因にして、国内の対立が起こり、内部分解する可能性も否定できない。しかし、民族、宗教、言語が違っても同じ仲間のマレーシア人であると言う意識を持ったならば社会が堅固になり、これが国民統合です。

独立するとどの国も国家統合と社会統合に努力しましたが、しかし、すくならぬ国で分離独立運動が起こりました。インドネシアはジャワ人が人口の約60%を占めているが、多くの少数民族がいて、オランダの植民地支配が終わると、一部の人びとは以前の小さな国、すなわち、「アジアの原型」に戻ると言って分離独立運動を開始します。これに対して、インドネシア政府は、「民族も宗教も違うから独立していいですよ」、と言ったかと言えば、そんなことはなく、分離独立運動の軍事的鎮圧をはじめたので、ここから紛争が起こったのです。これはミャンマーやスリランカ、それに中国もそうです。アジアで分離独立運動が起きた原因の一つは、植民地化される前は単一民族型社会だったが、植民地化の結果、多民族型社会に変容したことにあります。

宗教紛争もおこり、その代表国がインドとパキスタンです。独立にさいして、ヒンドゥー教のインドとイスラームのパキスタンに分離したが、分離を主張したのはイスラーム勢力だった。もしヒンドゥー教徒と一緒に国を作ったならば、人口の70~80%のヒンドゥー教徒に抑圧されると考えて、イスラームの国を作って分離したのです。植民地される前はムスリムもヒンドゥー教徒も共存していたが、イギリスの植民地支配を受けて、宗教の違いを原因に分離したのです。スリランカは2000年程前にインドからやって来た移民して来たシンハラ人が造った国で、彼らは仏教徒です。これ以外にも、1700年位前に南インドから移住してきたタミル人がおり、彼らはヒンドゥー教徒です。1948年に独立しましたが、独立後、多くのシンハラ人の間で、スリランカは仏教を信仰するシンハラ人の国であるという主張が起こり、これをシンハラ・オンリー政策と言います。独立時には、民族宗教が違うタミル人のヒンドゥー教も認めていたが、仏教が国教だとしてタミル人の民族文化を抑圧します。すると、タミル人が自分達は武力を使ってでも自分たちの民族文化を護る、そのために分離独立するとして、血で血を洗う武力闘争が起こり、何十万もの死者がでた。マレーシアも1960年代末にマレー人が、華人やインド人も居るが、マレーシアはマレー人の国であり、国語はマレー語、宗教はイスラームだと唱えると、激しい民族紛争が起きた。

アジアは独立したのは良いが、植民地時代に出来上がった多民族型社会を原因にして多くの国で分

離独立運動とか民族紛争、宗教紛争が起こったのです。この結果、独立した時は中国とベトナム等を除くと基本的に民主主義体制で出発したが、民族紛争や独立分離運動が起こると、民主主義的な体制では上手くコントロール出来ない、軍が政治に関与する権威主義体制が有効だとして、アジアは1960年代と1970年代に多くの国が軍政と権威主義体制に転換したのです。

5. 現代になるとアメリカのアジア関与：第二次の「他律」

1) 冷戦のアジアへの波及

アメリカのアジア関与によって、アジアを再び他律が支配するようになる。ただ同じ他律でも、ヨーロッパの他律はアジアの全面的支配ですが、アメリカの他律は「アジアを自分達の望む方向に動かす」と、それで満足したことに違いがあります。具体的にみると、アジアは1945年以降、基本的に独立しますが、大きくアメリカ陣営（自由主義国）と中国やベトナム等のソ連陣営（社会主義国）に分裂して激しく対立します。アメリカは冷戦の中でソ連の影響を抑え込む為に、アジアに軍事関与し、その結果、3つの分断国家が生まれました。韓国と北朝鮮、中国と台湾、北ベトナムと南ベトナムがそうです。中国と台湾は分離しただけですが、韓国と北朝鮮はアメリカが介入して朝鮮戦争が起こりました。1951年に北朝鮮が韓国に侵攻して国土の大半を占領すると、アメリカが急遽介入して、韓国の後ろにアメリカ、北朝鮮の後ろに中国とソ連が絡んで戦争が2年間続きました。ベトナムもフランスが独立を認めないので独立戦争が起きたが、1965年にアメリカは北ベトナムの共産主義勢力によるベトナム統一を阻止する為に軍事介入し、1975年までベトナム戦争が続きました。第二次世界大戦でアメリカが世界全体で使った爆弾は350万t位と言われていますが、ベトナム戦争でベトナムに落とした爆弾の量は700万tだと言われています。第二次世界大戦の爆弾の量の2倍もベトナムという一つの小さな地域に投下したのは、ベトナムの共産主義化を防ぐためだったわけです。

アメリカのアジア関与は戦争だけではありません。アメリカのアジアにおける最大の関心は中国にあり、中国に共産主義政権が出来たのは仕方がないが、共産主義がアジアに広がるのを防ぐ為にアメリカが一番関心を持ったのが如何に中国を封じ込めるかでした。しかし、アメリカはベトナム戦争に勝てないことがわかると、中国と和解して戦争を終わらせるしかないと考えて、1972年にニクソン大統領が訪中して中国と手を握ります。これによって、ベトナム戦争が終わり、アメリカの軍事介入が終わったのです。

2) 経済関与

軍事介入が終わると、アメリカはアジアへの経済関与を本格化します。アジアの全ての国が、植民地時代の貧困から脱却する経済開発に着手しましたが、経済開発とは紡績工場や自動車工場、パソコン工場などを作ることで、その為に資金と技術が必要です。しかし、アジアには資金や技術がないので、最大の投資国がアメリカだったのです。それだけでなくパソコンを作ると売らなければならないが、アジアは国民の所得が低いので、最大の輸出市場がアメリカです。要するに、アジアは、アメリカの投資を得て、国内で工業製品を造り、それをアメリカに輸出して発展した、これがアジアの成長パターンです。冷戦が終わると、アメリカの投資と貿易は中国やインドとも本格化し、アジアの経済発展はアメリカの関与があって可能になったものなのです。

3) 冷戦終焉後にアジアの「アメリカ化」

社会はどうかと言うと、アジアの「アメリカ化」がそうです。朝鮮戦争やベトナム戦争のさいに大勢の難民が出ましたが、難民は何処に行ったか、日本にも来ましたが、ほとんどがアメリカです。アメリカは、軍事介入したが、紛争から発生した難民の最大の受け入れ国でもあったのです。そして、冷戦が終わった現在、アジアの若者はアメリカの大学教育を志向し、庶民はアメリカ型消費生活スタイルに憧れ、ビジネスマンはグローバル化の下で、高層オフィスビル群で働いているが、これがまさにアメリカのライフスタイルです。ベトナム戦争が特にそうですが、アメリカは軍事力で自分の望む方向にアジアを持って行く事は出来なかったので失敗しますが、しかし経済や社会ではまさにアメリカの望む方向に動かした、しかも強制ではなくアジア人が自らアメリカ化を志向した結果なのです。

6. アジアの展望

1) アジアの自律の回復＝経済発展、民主化、「アジア共同体」

アジアは稲作を中心とした農業国でしたが、独立後の経済開発により工業国になり、その代表が中国です。現在世界は、ヨーロッパ（EU）、アメリカ、アジアが三大経済圏と呼ばれているが、植民地時代のアジアは取るに足らない存在だったが、EU やアメリカと肩を並べる様になったわけで、これが自律の回復です。

先程、民族紛争が起こった結果、アジアの多くの国が軍政の権威主義体制になったと言いましたが、軍政などを止めて民主主義の国にする、これを民主化と言います。アメリカなど欧米諸国の民主化圧力と、経済発展の結果、それ迄の農民が中心だった社会が、学生、サラリーマン、学校の先生など、彼らは中間層と言いますが、多くの国で中間層が登場した。全ての国がそうではないのですが、彼らは軍政とか権威主義体制を認めないで民主主義体制を志向するとされており、1990年代になるとアジアの多くの国が民主化されました。

アジアは経済発展して自律を回復し民主主義体制になると、現在起こっているのがアジア共同体です。これは、1967年に東南アジアの国が、ベトナム戦争が始まるとアメリカを支援する目的で東南アジア諸国連合（ASEAN）を作り、当初は反共自由主義諸国の軍事同盟だったが、ベトナム戦争が終わるとベトナムを入れた東南アジアの地域協調に転換しました。そして、2000年代になると南アジアと東アジアを巻き込んでアジアの安定と発展を指したのがアジア共同体なのです。実体はありませんが南アジアも、ASEAN に倣って地域協力を進める為に南アジア地域協力連合（SAARC）と言う組織を作りました。ただ、東アジアにはありません。その理由は、東アジアは中国と台湾が対立し、韓国と北朝鮮も対立している、さらには、日本と中国、日本と韓国が仲良くなく、地域諸国が対立しているので一緒になって纏まる動きが出てこないことにある。それだけでなく、中国は、韓国や日本と一緒にアメリカや世界に対して発言する必要が全然ない、中国一カ国でアメリカやヨーロッパに対抗出来るので、ここから東南アジアの様に地域協力する動きが出て来るのは難しいという事情があります。

2) 世界のなかでみた現代アジア

最初に触れましたが、中国とインドは世界の頂点にいた。そのためヨーロッパや中東、当時のアメリカに関心がなく、これが世界征服を試みなかった理由です。現在はどうかと言いますと、中国とインドはアジアだけでなく世界の大国を志向しているが、他のアジアの国々は自立がキーワードです。植民地支配が終わって独立国家になった現在は、自立を大切にすることがアジア諸国の意識だと思います。

3) これからのアジアを考えるさいに注目される動き

最後に、分断国家がどうなるか述べてみたい。1990年代にアジアが民主化された時が、分断国家を解消するチャンスだったが、中国と台湾、韓国と北朝鮮は分断国家のまま残ってしまった。ヨーロッパやアメリカからすると、冷戦の中から誕生した分断国家は東西ドイツの統一で終わっている。この立場からすると、統一は世界の課題ではなく、当事者国の問題だということになり、軍事力を使わない限り、欧米諸国は関与する意思が薄いのが実情です。中国と台湾の統一は、中国の民主化の行方が絡んでいるが、先程みた国家統合の観点からすると中国は台湾の独立は絶対に認められない、台湾からすると、民族的に同じだが何故一緒になりたくないのか、それは中国が共産党支配の国だからです。見方を変えて言えば、台湾にとって、中国が共産党支配の国でなかったら統一しても何の問題はないことになる。ただ、中国で共産党の一党独裁が終わって民主的な国になるのは、簡単なことではないように思う。30年前に民主化を求める天安門事件が起きたのは、一部の共産党指導者が民主化の方向を認めたからで、現在の指導者の習近平はナショナリズムを重視し、また中国の経済発展は物凄く、現在世界第二位ですが、この経済力を背景に日本やアメリカに依存する必要がないので、中国が世界に大きく関与しようとしている。すなわち、経済力を基盤とするナショナリズムを背景に中国を中心に世界を動かすことができると考えている。中国の国内民主化勢力への弾圧は物凄く、香港で

も人権と民主化を抑圧しているのです、国内から民主化運動が起こるのは難しいのではないかと思います。

世界をみても、1990年代にアメリカを中心に欧米諸国がアジアの民主化を推進したが、現在のアメリカはそれに関心がなく、トランプ大統領は国益第一だし、イギリスもEUから離脱してヨーロッパや世界との協調よりも如何にして自分の国益を守るかにあり、アジアの民主化に関心が無い。他方、中国はアジア諸国に大規模な援助をしていて、アジアに影響力を強めたいという意図はあるが、ただ、中国がそう思っても、インドネシアなどアジアの国は自立を重視している。経済発展の為に中国に資金を依存するが、自分達は政治的に自立したいと考えているので、中国の思う通りには行かないように思う。その中で日本の役割は何か重要だが、問題は、中国のアジア戦略と世界戦略は一带一路など、巨大な経済援助で世界を中国の影響下に置くことにあり、これは良い悪い抜きにして1つの戦略ですが、日本にアジア戦略や世界戦略があるのかどうかにある。私は日本には戦略がないと思っているが、日本は、古来は中国を向いていたが、明治以降はヨーロッパを向き、第二次世界大戦後はアメリカに向いている。これで日本は何とかやってきたし、今後もアメリカを向いてれば何とか出来ると考えている。日本がアジア戦略を持ってない理由の一つが、ここにあるのではないかと思います。

【質疑応答】

Q: 25年位前に或る大学の先生と中国問題の話をしていました質問は中国の発展の段階で格差問題や中国共産党の一党支配、民主化の問題等について中国はこのまま矛盾を孕んだまま成長するのかと質問をした、その先生は「中国は一つの宇宙で我々の常識を超えて国内、関連諸国の問題を含めて一つの宇宙として存在しているから問題はない」と言われた未だに良く解らない先生はどう思われますか。

A: 経済成長と民主化の関連がどうなるのか、その先生の話は、中国は1つの世界だということ、言ってみれば中国特殊論で説明されたと思うのですが、私はそう言う観点ではなく中国も世界の一つの国という観点から見たいと思います。そうするとどうなるのか、台湾、韓国、インドネシア、タイがそうですが、これらの国で民主化が起こったのは、経済成長の結果、中間層と呼ばれる集団が形成されたからです。中国は現在一生懸命に経済成長を続けようと頑張っていますが、成長が止まると今迄成長の成果の恩恵を受けてきた中間層の生活が破綻する。他方では、現在、農民は自分達も将来都市に住む人の様に豊かになりたいと思っている。でも経済成長に失敗すると彼らが豊かさを享受出来ないで、中国共産党が今一番恐れているのは経済成長が止まる事です。そのため、経済成長路線を降ろす事が出来ない。これは、韓国も台湾もインドネシアもタイもそうだったので、中国も成長して民主化したアジアの国と同じ道を進んでいるのではないかと思います。つまり、現在は力で民主化勢力を抑え込んでいますが、成長に失敗すると国民からの圧力を受けるし、他方では、成長が進むと民主化圧力を押さえ切れないうというジレンマに直面している。これはまさに20年前や30年前に韓国、台湾、インドネシアが歩いて来た道であり、基本的に中国もそこから大きく違ってないと言うのが私の見方です。

Q: 韓国、北朝鮮の統一に双方のトップがどのようなシナリオを描いているのかブラックホール見たいで相変わらず解らない先生の見解をお伺いしたい。

A: 率直のところ私にも良く分からないのが実情です。北朝鮮と韓国の統一問題について、北朝鮮は今の立場は変わらないので、統一がどうなるのか重要な要素は韓国だと思います。韓国は冷戦崩壊後、北朝鮮と対話路線をとる大統領と、北朝鮮は敵国とみる大統領が交互に就任したが、現在の文在寅大統領は対話路線を採るタイプで、これは国民がそう考えている事の反映だと思います。ただ難しいと思うのは、文在寅大統領は融和路線を採っているのに、北朝鮮が歩み寄っては来ないことです。すると、韓国よりも北朝鮮の態度の変化が重要な要素になりますが、その場合、中国の民主化が絡んでくると思う。というのは、北朝鮮が強い態度を採れるのは、経済的に苦しいが中国が経済的に支援しているからで、そのため中国の支援がなくなると、北朝鮮の体制が崩れることになる。中国が支援を止めるのはどう言う場合かという言えば、中国が民主化されることです。そのため民主化は、単に中国

だけの問題ではなく北朝鮮に波及して来ると言う連鎖関係にあると思います。

Q：東南アジアの支配について基本的にイギリス、フランスが取った政策は分断統治、宗主国の人間がいて、現地人、その中間の層に華僑、インド人がいた、例えばビルマ、ミャンマーはかつてビルマ人の国だったがイギリスの支配下になってインド人が入って財政金融、中国人が行政関係、ビルマ人は最下層におかれたしまった、その分断統治政策について、植民地分断統治によって現地人は華僑、インド人に抑圧されたと言う感情が生まれた、その良い例がベトナム戦争後の中国人で、ポートピープルと言われ多くの人が逃げ出していますその大半が華僑と言われています、その様な感情が現在の東南アジア人に残っているのではと思うのですがその点をお伺いします。

A：分割統治は現地民族を利用した政策と言う事で良いと思います。イギリスがインドで宗教の分割統治をしたのが典型的な例です。東南アジアの植民地化の最大の目的は、一次産品を開発して商品経済を進める事にあつたので、当然にイギリス企業がそれを担いましたが、アジア人も経済活動に参加しました。しかしマレー人やインドネシア人など、土着の人達は経験がないので、東南アジアの開発にイギリスは華人やインド人を上手く起用したのだと思います。これに対して、マレー人やインドネシア人から当然反発が起こり、タイやベトナムでも現地人の間から華人に対して反発が起きて暴動が起こった。独立後も国籍を取ったインドネシアやベトナムやタイの華人に対して政治的、経済的な抑圧がありましたが、その遠因は植民地時代に自分達が受けた苦しみへの反発があつたのは確かだと思います。アジアの国は独立したが多民族型社会を如何に纏めるかの難しさがここにあると思います。

岩崎 育夫 (いわさき いくお) 先生のプロフィール

【経 歴】

1949年(昭和24年) 長野県生まれ
立教大学文学部卒業
アジア経済研究所(1974年～1999年) 地域研究第一部 主任調査研究員
この間1980年～1982年 東南アジア研究所にてシンガポール滞在
拓殖大学 国際学部 教授(1999年～2019年)
現在 アジア研究者

【主要著書】

『リー・クアンユー』岩波書店 1997
『物語 シンガポールの歴史』中公新書 2013年
『アジアの国家史』岩波書店 2014年
『世界史の図式』講談社メチエ 2015年
『入門 東南アジア近現代史』講談社現代新書 2017年
『アジア近現代史』中公新書 2019年
『近代アジアの啓蒙思想家』講談社メチエ(刊行予定)